

# 祭祀とブツダの主張

雲 井 昭 善

—

佛教王アショーカの法勅を刻んだ摩崖法勅第一章によると、

ここに「朕が領土」にありては、如何なる生物といえどもこれを屠殺して犠牲に供してはならない。又、「犠牲をとまなう」宴会(Samaja)をなしてはならない。何とならば、天愛喜見王は、宴会における多くの罪過を見るから。<sup>(1)</sup>

と、勅を下している。同じく第四章においては、

過去、長期幾百年の間は、ただ生類を屠殺し、有情を殺害し、親族に非礼をなし、沙門、バラモンに非礼をなすことが増長するだけであつた。

と、事実を述べている。

この法勅は、アショーカ王が、従来のバラモン教の宗教習俗のうちで最も強く否定した点であつた。このことは、

ただにアシヨーカ王に限られたことではなく、ジャイナ教をはじめ、原始佛教全体を通じてブッダの強く主張したところである。

ところで、アシヨーカ王をはじめ佛教において、なぜ不殺生がとりあげられたか。このことは、直接にはバラモンの祭祀、供犠の宗教と関連する課題である。では、バラモン宗教において、なぜ祭祀が重要な位置を占めていたか。そして、それとは対照的に、佛教においてなぜ祭祀が批判され、否定されねばならなかったか。その批判は如何なる点に向けられ、又、その否定は如何ようになされたか。

佛教と、それに先立つバラモン宗教とを比較するとき、そこに幾つかの異質的なものを見出すことができるであろう。その場合、比較される幾つかの要素の中で、これこそが根本的な相異であり、それ故にこそ、その相異によって、両宗教の根本的立場を簡直に語りつくした場合もある。従来、佛教とバラモン教との相異を論ずる場合、主としてその教義上の問題が中心になされてきたようである。

この小論は、祭祀の問題に関して、両宗教が如何なる態度をとっていたか、という点をとりあげ、それによって、佛教とバラモン教との宗教としての本質をさぐってみようとするものである。

## 二

さて、祭祀、供犠に関するこの両宗教の立場の相異を述べるに先立って、一つの視点を提供しておきたい。それは、バラモン宗教からいわゆる佛教興起への思想的展開にとって、一橋梁となった一般思想界の動き、自由思想家の主張である。

六師〔外道〕の中で、バラモン宗教の本質を形成する布施、供犠、祭祀という行為を全く無意義なものとして拒絶したのは、周知のようにアジタ (Ajita Kesakambalin) である。

彼は主張する。

- (1) 布施〔をなしてもその効力〕なく (a' atthi dinnam) 供儀も祭祀も〔その効力が〕ない。(a' atthi yittham a' atthi hutam) 善悪業の異熟果もなく、この世もなければ他の世もなく、母もなく父もなく化生の有情もない。
  - (2) 人は四大種より成り、死すれば地〔大〕は地身に還り、水〔大〕は水身に、火〔大〕は火身に、風〔大〕は風身に還り、もろもろの感覺器官は虚空に還元してしまふ。<sup>(2)</sup>
- と。

このように、アジタはバラモン宗教の本質とも言いうる (1) 布施、供儀、祭祀を善業とする従来の觀念を打破し、(2) これらの行為によって来世に生天するという、その来世をも否定しようとした。このことは極めて重要な意義をもつものであり、バラモン宗教と根本的に対立する一面である。けれども、このアジタ説においては、四大所造という唯物論的見解に立って、あくまで現世に中心をおいての主張であったため、ただ布施等の無意義なことを論ずるにとどまっていた。それ故、なぜ布施や供儀、祭祀が無意義であるか、という問題には、深く立ち入っていない。

六師の一人プーラナ (Purāṇa Kassapa) は、布施や祭祀によっては功德なし、と声明する。

恒河の北岸にて布施し、布施せしめ、祭祀し祭祀せしむ (dadanto dāpento, yajanto yajāpento) とも、これによつて功德 (福德 punna) の生ずることなく、又、功德の果報もない。<sup>(3)</sup>

とは、彼の主張である。しかし、アジタやプーラナ説とは正反対に、当時の沙門、バラモンたちの中には、布施等の行為を肯定した人もある。彼らは、

布施あり、「布施によつて効果ありの意」供儀あり、祭祀あり、善悪業の異熟果あり、この世あり、他の世あり……中略……乃至……自知自証して教化する沙門、バラモンあり。

と、主張する。従つて、ブッダ時代においては、供儀、祭祀等の行為を全面的に否定する論者と肯定する沙門、バラ

モンが存在していたことが推知できよう。そして、ブッダがこの両論者に対して如何のような批判を下したか、が、当面の問題として提起される。

中部第六十経 (*Apariyāka Sutta*) によると、布施等の行為を否定する説に対しては、「彼らが身の善業、口の善業、意の善業という如き三善法を避けて身、口、意の三不善法を実習する」ことになるから、そういう人は「不善の法の災いと、罪悪と穢汚を見ない故、非正法として許されない」と論難する。他方、布施等の行為を肯定する人に対しては、それとは反対に「三不善法を避けて三善法を実習する」から、「若し他の世界があるならば」「善趣、天界に生れる」ことになろう、と語っている。

本来、この中部第六十経の主旨は、ブッダ時代になされていたいろいろの主張（戯論と呼ばれているが）を列挙し、それらを順次に批判しつつブッダ本来の中道の実践義を示そうとしたものである。このような本経の主旨からすれば、前述した二つの主張の中で、布施等の行為を肯定する沙門、バラモンに対するブッダの批判精神も亦、自ずから検討される性質のものであろう。布施等の行為が、よし三善法を実習する動機となつて、死後、善趣・天界に生れることを約束したとしても、それがブッダ本来の立場であつたとは早計に理解してはならない。なぜなら、善悪業報の有を説く論者も、善悪業報の否定、有作用論 (*Kiriya-Vada*) と無作用論 (*Akiriya-Vada*)、無因論 (*Ahetu-Vada*) と有因論 (*Hetu-Vada*)、或いは涅槃の有・無を論ずる他のいろいろの主張（＝戯論といわれる）と、同じ次元において語られていたのだから。

このように、ブッダ時代は、従来のバラモン宗教よりうけついで祭祀等の行為をめぐる否定、肯定の対論がなされてきた。ここで、特にわれわれの注意をよびおこす点は、アジタやプーラナ説に対する反論、すなわち祭祀や布施等の行為を肯定する論者の占める位置である。前出の經典等によれば、他の沙門、バラモンとのみあって特にその論者の名を掲げてはいないが、このような論を成立せしめたゆえんは、そもそも奈辺にあつたであろうか。

バラモン宗教の本質は、どこまでも祭祀中心である。では、なぜ祭祀が重要な要素を占めていたのか。

バラモン宗教では、神、祭祀、司祭者としてのバラモンという三つの要因が、その中心をなしていた。古代インドにおいて、はじめて宗教的感情が芽生えたとき、古代人は自然現象の内奥に潜在する神の存在を意識し、その素朴な感情を通して神に祈禱し、讃歌を捧げしめた。言わば、インド古代人にとって、自然現象を支配する諸神の存在を意識し、信ずることが、その宗教的感情のすべてを占めていたと言ってよい。彼ら古代人は、神に祈禱することによって、現世の吉祥、安穩、幸福、繁栄を願い、そして死後においては、すべてが充たされる世界に生れることを、何の疑念をさしはさむことなく信じていた。そのために、「神に神酒を供え、神を讃え」<sup>(5)</sup>たり、或いは又「声高らかに祈禱のことはを捧げては、供物を捧げて祭りをなした」<sup>(6)</sup>のである。ところで、ブラーフマナ（梵書）において、司祭者としてのバラモンの地位が確立するにつれて、祭祀が一層に重視され、祭祀そのものに神秘力ありと考えられた。しかも、いわゆる神々と、学識あるバラモンの両者に対して供することが、主張されるようになった。

二種の神あり。神は神なり。学識あり、ヴェーダに精通したバラモンは人間たる神なり。これらの神に対する犠牲は二種に分れる。祭贄は神に対する犠牲にして、布施は人間なる神、即ち学識あり、ヴェーダに精通するバラモンに対する犠牲なり。祭贄によりて神を満足せしめ、布施によりて人間なる神、即ち学識あり、ヴェーダに精通するバラモンを満足せしむ<sup>(7)</sup>と。

バラモン宗教においては、何よりもまず、神に対しては祭贄を、人間なる神、即ちバラモンに対しては布施を強調する。そして、これらを実行することによって、来世には天界に生れることを約束する。この場合、神に対して何を

供するか、或いは又、如何なる祭りがなされたかが問題となる。

バラモンの多くの祭りの中で、特に佛教にとつて関心の対象となるものに、供養祭 (Haviryajña) に属する供獸祭 (Nirudhapasubandha) と、ソーマ祭に見られる馬祠祭 (Asvamedha) 及び人祠祭 (Purusamedha) がある。供獸祭は、動物、特に山羊をインドラ (Indra) 神、アグニ (Agni) 神、スーリヤ (Surya) 神、生主 (Prajapati) 神に供する祭りで、これによつて豊年を祈念し、又、怨敵退散にあてる。馬祠祭は、リグ・ヴェーダの時代より行われていた祭典で、馬を犠牲として神に供する祭典であり、頗ぶる大がかりな祭りであつたと言われる。後代には、国王によつてのみなされたようである。

人祠祭は、馬祠祭と同じく馬の代りに人間を供する祭りであり、言わば人身御供である。ヒレブランド (A. Hillebrand) 氏によれば、この人祠祭は、インドにおける野蛮時代の残滓 (der Überrest eines barbarischen Zeitalters) と述べているものであるが、馬祠祭、人祠祭ともに原始佛教聖典においても関説しているところである。例えば、相應部經典の中に、馬の供儀 (Assamedha) 人の供儀 (Purisamedha) の祭祀に関説している。

ところで、バラモン祭祀の中で、特にブッダによつて批判の対象となつたものは何であつたか、と言えば、当然、不殺生、不害思想に関連する諸供儀であり、そこに又、佛教の、宗教としての目ざすところもあつたわけである。そして、そのことは、同時にブッダの祭祀観の根本義に連なるものと言えよう。以下において、この問題を追求してみたい。

#### 四

バラモン宗教において用いられた祭祀には、多くの動物、植物の犠牲を必要としたことが認められる。バラモンたちは、司祭者として、或いは人間である神としてこの祭祀を實行し、又、行わしめた。ために、多くの人畜を犠牲に

供せざるを得なかったことは、容易に理解できるところである。事実、初期の佛教聖典 *Suttanipata* においても言及しているし、<sup>103</sup> 又、相応部第三、九経によると、かなり、当時の供儀について詳細な記録が伝えられている。われわれは、それらの資料によって、ブッダ時代にまで影響を及ぼした多くの供儀のあとをふりかえり、それに対するブッダの批判のあとを辿ってみよう。

或る時、世尊が舍衛城に留まっていた時、コーサラ (Kosala) 国のパセーナディ (Pasenadi) 王の大供儀 (Mahayajña) が行われようとしていた。五百の牡牛、五百の牝牛、五百の山羊、五百の羊が供儀のために柱に縛られていた。又、王の奴隷、召使、下男、彼らも刑罰に恐れ震い、涙を流し、泣きながら準備していた。比丘らはこの様子を見て世尊に告げたところ、世尊は次の偈を歌ったという。

馬の供儀 (Assamedha) 人の供儀 (Purisamedha) シャムヤの投擲 (Sammāpāsa) 勝利の力飲祭 (Vajapeyya) 無遮会 (Niraggala) 大供儀 (Mahayajña)。これらの供儀は事多くして大果なし。(na te honti mahapphalā)

山羊と羊と牛とが種々殺される。その供儀には、正しい道を行く大聖は行かず。

事少くして常に行われ、山羊も羊も牛も殺されることのない供儀には、正しい道を行く。大聖は行く。<sup>104</sup>

と。ここでは、馬祠祭や人祠祭等の供儀が極めて益なきことを述べ、特に動物が殺されるという点に激しい批判をなしている。このような資料は、増支部経典の中にもみられる。ここでは、ゴータマ・ブッダの意見がより判っきりと窺われる。

ウッジャヤ (Ujjava) パラモン僧が、世尊の許へ行って「ゴータマは祭祀を称讃しないのですか」と問うた。ゴータマは言う。「バラモンよ、われは一切の祭祀を称讃しない。しかしながら、自分は一切の祭祀を称讃しないというのではない。

バラモンよ、祭祀の時に牛を殺し山羊や羊を殺し、鶏、豚を殺し多くの人間を殺すような祭祀を称讃しないのである。……中略……バラモンよ、自分は牛を殺さず、山羊や羊を殺さず、鶏、豚を殺さず、多くの人間を殺さないような祭祀を称讃する。

何故かと言えば、そのような祭りには、阿羅漢、或いは阿羅漢道に入れるものは近づくからと。

勿論、右の經典では、祭祀そのものを否定しないで、供儀をとまなう祭祀のみを否定しているが、そのことは、ゴータマ・ブッダによって言われる施・戒・生天の思想と関連するものであって、佛教本来の建前からすれば、本質的なものではない。このことは、ブッダが、如何ような祭祀をなすよりも修養のできた人 (bhavita) を重んじた (Sw. 106.~107.) 点に窺われようし、そこにこそ、佛教の根本的態度がうち出されていると思われる。

月々千金を投じ、犠牲を供すること百年なりとも、一人のよく修養した人に瞬時たりとも供養したならば、この供養は百年の祭祀よりも勝る。<sup>(7)</sup>

村中にて祭火に奉仕すること百年なりとも、一人のよく修養した人に瞬時たりとも供養したならば、この供養は百年の祭祀に勝る。<sup>(8)</sup>

この世において、福を求めて一年の間、或いは供儀を、或いは祭祀を行つても、そのすべては、行いの正しい人を尊敬することの四分の一にも値いしない。<sup>(9)</sup>

とは、法句經に説くところである。

## 五

ところで、初期佛教資料において、祭祀を司どるバラモンと、これに対して批判的立場に立つゴータマ・ブッダとの確執が多く語られている。これらのあとを辿ってゆくと、そこに、ブッダ時代における司祭者バラモンの態度なり、ブッダの供儀に対する理解が把握される。そして、この両宗教の担い手をめぐって、微妙な動きがあったことも推知できる。以下においては、この点に焦点をおいて考察しよう。

先ず、ゴータマ・ブッダにとつて、その修行期に経験したと伝えられるエピソードをたぐることになしよう。

ブッダが、ゴータマ・シッダッタとしてネーランジャラー (Neranjara) 河畔で専心修行していた時、悪魔のナムチ (Nannuci) がゴータマに語つた。

汝がヴェーダ学生としての清浄な行いをなし、聖火に供物を捧げてこそ多くの功德を積むことができる。<sup>20</sup>

と。この一文は、当時、正統バラモンの流れを汲んでいたバラモンたちが、苦行するゴータマに対して苦行の利益なきことを語り、悪魔ナムチにことばをかりて祭祀バラモンの陣営に引き入れようとした事情を述べたものである。ここに、ブッダ時代における二つの思想の交錯するあとを窺知しうる。しかし、犠牲祭に関する叙述の中で、多くの問題を投げかけた經典としては、長部第五經 (Kūṭadanta Sutta 漢訳長阿含經卷第十五究羅檀頭經) にしくものはなからう。この經典では、バラモン僧クータダנטタ (Kutadanta) が盛大な犠牲祭を行わんとしてブッダに教えを乞うた、というのがその大要である。それによると、<sup>21</sup>

マガダ (Magadha) 国のセーニヤ・ビンビサーラ (Seniya Bimbisāra) 王より授けられたカーヌマタ (Kāṇumata) のアンバラッティカー (Ambalattika) 園にて盛大な犠牲祭が行われようとして、七百の牡牛、七百の牝犢、七百の牝羊、七百の牡羊が犠牲の祭壇近くの柱のところへ運ばれていた。その時、バラモン僧クータダנטタは考えた。《沙門ゴータマは、三種の犠牲祭式と十六祭法とを知っていると聞くが、自分は知らずして今、盛大な犠牲祭を行おうとしている。ゴータマに聞きたいものだ》と。

けれども、マガダ国王より尊敬されているクータダנטタが、沙門ゴータマに教えを乞うことはふさわしくない。ゴータマこそ来るべきである、と多くのバラモンたちはクータダנטタに告げた。クータダנטタは、ゴータマこそ勝れていると言つてゴータマの許へ走り、犠牲祭式について教えを乞うた。ゴータマは、マハーヴィジタ (Mahāvijita) 王の故事を語つて順次に供犠に関して述べ、(一)四種の承認と、(二)王が八法を成就すること、(三)顧問のバラモンが四法を成就することの三種の法と、合計十六祭法を

説いた。そして、その犠牲祭においては、

「牛は殺されず、羊は殺されず、鶏、豚は殺されず、種々の生き物も殺されず、樹木は切られず、吉祥草は祭式用として刈られず、家僕、雇人、使用人も鞭でおどされたり、泣きながら供儀を準備する必要もない。酥、油、生酥、凝乳、蜜、砂糖のみにて犠牲祭は完結した」

と、語った。しかも、これらの犠牲よりもなお勝れたものとして、ゴータマは、(一)常時の施与、(二)精舎の寄進、(三)仏・法・僧に帰依すること、(四)五戒を守ること、(五)四禪に住すること、がより勝れていることを説明した。

云々と。

右の經典において、バラモン僧クータダダタが、ゴータマに供儀の方法、正しい供儀の在り方を尋ねたということ、当時の社会通念としては不可解である。けれども、本経の構成からすると、ゴータマが犠牲祭に関して如何に關心を寄せ、又、それが如何に眼に映じてそれを拒否するまでに到ったか、という点について、われわれに一資料を提示したのと言えよう。しかも、動物が犠牲に供せられない多くの勝れた供養のあることが語られたことは、さき述べてた「犠牲を伴わない祭供を称讃す」という立場を、更に超えていたことを物語っている。ブツダの立場は、あくまでも、

バラモンよ、火を焼いて清浄を得ると思う勿れ。これは外のことなり。外物によりて清浄を求むる人は、これによって清められずと智者は言う。バラモンよ、われは火を焼くを止め、内なる火をもやす。<sup>(2)</sup>  
であった。或いは又、

或る人は誤まれる三業に立つて供施す。傷つけ、殺し、悩まして「供施」す。この涙に汚れ、殺害のある供施は正しき施に値いすることなし。<sup>(3)</sup>

と、批判する。そして、ゴータマが、なぜ供儀「の宗教」を否定したかについて、決定的に語った資料として、ここ

に増支部の一經を紹介したい。

世尊が舍衛城のジュータ林に住していた時、ウツガタサリーラ (Uggatasariia) バラモンの大供儀があった。五百の牡牛、五百の牡犢、五百の牡羊、五百の牡山羊が供儀のために供せられた。その時、世尊はバラモン僧ウツガタサリーラに「汝は供儀によって善をなすと思っているがその実は不善をなすのだ」と教えた。すなわち――

バラモンよ、供儀の前に火を点じ、柱を建てしめつつこの心を起す。供儀のためにこれだけの牡牛を殺せよ。乃至これだけの牡犢を、牡羊を、牡山羊を殺せよ。彼は《善をなす》と思つてなしても不善をなし、《善趣の道を求む》と思つてなしても悪趣の道を求めるようなものである。それでは、却つて供儀の前に不善にして苦を生じ、苦を異熟とする身・語・意の三刀を建てるのと同じことである。又、供儀の前に点じられる三火（貪・瞋・癡）は断ちきらねばならない、と。これを聞いてウツガタサリーラは、「尊きゴータマよ、われは五百の牡牛を放ち生命を与えん。五百の牡羊を放ち生命を与えん。五百の牡犢を、五百の牡犢を、五百の牡羊を、五百の牡山羊を放ち生命を与えん。青き草を食め……」と語つてゴータマに帰依した。

云々と。

右の經典は、供儀に対するブツダの意向のほどを示してあまりあろう。

ジャータカ第五十 *Dummedhujātaka* は、供儀の無意義なることについて、次の如く述べている。

ブラフマダッタ (Brahmadatta 梵与) 王がバーラーナシー (Barānāsī 波羅奈) の都で国を治めていた時のことである。當時、バーラーナシーの住人たちは、神を祭り、神に帰命して山羊・羊・鶏・豚を殺し、種々の花や香や肉や血で犠牲祭を行った。その時、菩薩は、「この頃、人民は神を祭つて獸類を多く殺害している。人びとは一般に非法に傾むいている。私は、父の死後に王位を得たならば、生物を殺したりする者を一人も見ないようにしよう」と誓つた。そして、父王の死後、王位を継承した時、臣家たちに、

「いま、神に供物を捧げよう。その供物は、自分の在位中に殺生等の五不行為や、十不善行為をなした者の肉や血である」

と、宣言した。王の命令を聞いて以来、王在位中に殺生等の不法行為がなされなかった。<sup>25</sup>  
云々と。

佛教は、五戒の最初に不殺生戒を挙げる。このことは、宗教と社会倫理の観点からして頗ぶる重要な意味をもつものである。尤も、不殺生を宣言したのは、なにも佛教に限らない。生命あるものに対する不害 (ahimsa) を力説したのはジャйна教であった。では、佛教において、なぜ五戒の最初に不殺生戒を掲げねばならなかったか。

ブッダは、供養を尊ぶバラモン宗教において多くの動植物の生命が破壊されることに対し、はげしい悲しみ、あわれみを感じた。そのことは、耕耘祭におけるシッダッタ太子幼年期のエピソードにも伝えられるところである。この感情が、ブッダの全生命を貫ぬく慈悲の精神として培われたのではなからうか。

心に一切の生けるものをあわれみつつ、聖者は多くの功德をつくる。

生きものに充ちたる大地を征服して、馬祠、人祠、シャムヤの投擲、ソーマ祠、無遮会の主催者として遊行する聖者も、いつくしみにみちたる心をよく修したる人の十六分の一にも値いしない。<sup>26</sup>

と。或いは又、

われは万人の友なり。万人の朋友なり。一切の生きとし生けるものの同情者なり。いつくしみの心を修して、常に無傷害を楽しむ。<sup>27</sup>

と。もとより、これらのことは佛教聖典に限った叙述ではない。例えば、

修行者は一切の生きとし生けるものに対して、あわれみ、同情あれ。<sup>28</sup>

とは、ジャйнаにおいても語るところである。

このように、佛教における慈悲の精神は、勿論、ブッダの心に培われたものであったにしても、ブッダ時代の共通の時代意識、又は宗教意識であったとも考えられる。では、なぜ、佛教やジャйна教の興起した西紀前五、六世紀に

なつて慈悲を説く思想が現われたか。この問題について、中村元博士は「当時、農業生産が増大し、工業も進展して上層階級に生活のゆとりが出来て反省の機会が与えられたこと」及び「商業の発展にとって平和を求めることが望まれたこと」の二点を挙げてゐる。勿論、そのことは、社会的背景において重要な意味あいをもつものである。しかし、私は、更にもう一つの理由を掲げたい。それは、前五、六世紀において澎湃として興つてきた自由思想家たちが、バラモンの供儀、祭祀の宗教に反対した。ただし彼らは、何故に供儀、祭祀が無意義であるかについて、決定的な理由を表明しなかつたようである。供儀を否定した人びとは、ただ現世主義を肯定する立場から、供儀によって生天の果報を得るとするバラモンの思想を否定したに過ぎなかつた。これに対して、ジャイナをはじめ佛教の主張の力点は、むしろ、供儀、祭祀にとって不可欠の要素たる動物の犠牲ということに向けられていた。それは、宗教としての形態を批判する立場から、更に内容を問題にしていたことでなくてはならない。そこから、犠牲をとまなうバラモン宗教に対して、慈悲の精神を主張する新しい宗教が芽生えたと主張したい。この精神的基調が、アショーカ王の政治理念にまで発展したと考える。

## 六

佛教において、供養 (Pujana) ということばの占める比重は極めて大きい。「一人のよく修養した人に瞬時たりとも供養したならば、その供養は百年の祭祀よりも勝る」とは、法句一〇六く七偈の言うところであつたが、後世の大乗經典に言われる供養等のもつ意味内容から考えて、祭祀と供養との本質的な相異を考慮しなければならぬ。

さきに述べたように、ブッダの祭祀観にはいくつかの階層があつたことが知られる。バラモン僧クータダンタに語つたゴータマの説明にもあつたように、(一)動物の犠牲よりも、(二)酥・油・蜜・砂糖等の犠牲、そしてこれらの犠牲よりも、(三)常時の施与、精舎の寄進、三宝帰依や五戒を守ることの重要性が、既に初期佛教において言われてきた。他

方、「一人の修養した人」に対する供養の勝れていることが言われた。それらの内容を仔細に検討してみると、ブッダの意図する供養は、その何れもが、本来は出家者なり、道を求め完成された人に対してなされるものであって、特定の神に対して犠牲の対象となるものではなかった。このことは何を意味するものであろうか。

供養は神に対してなされるものであり、供養は三宝なり、心を修めた人に対する（後世では佛）ものという考え方は、そのままバラモン宗教と佛教との在り方を示唆してあまりあろう。神の宗教、祭祀の宗教を標榜するバラモン教は、本質的には神の恩寵をねがう宗教であり、そのために、祭祀という儀式作法にすべてを委ねる方向へと向わねばならない。その場合、古代インドのバラモン宗教にあっては、供養を媒介として人間と神との距離を接近させようとし、祭祀そのものに神秘力を認めて祭祀を目的とした。有神論にあっては、人間と神との関係が主なる条件である以上、祭祀も亦、当然に生れるべくして生れた方法である。

ひるがえって、佛教はあくまでも無神論を建前とする。そのことは、いつの時代にあっても厳然たる事実であり、佛教の標榜するところである。ここでは、われわれ人間に対するものは神ではなくして道を求め、完成した存在に向けられる。よしそれが佛という存在であるにしても、初期佛教の表現をかりて言えば「導びく人」(Zupitara)であった。導びく人に供せられるものは、動物による犠牲物ではなくして華香・塗香等の淨物か、或いは礼拝等の行為であり、それは同時に又、道を求める人びとの心に連なるものである。

以上、祭祀、特に犠牲を内容とするバラモン宗教の祭祀に対するゴータマ・ブッダの基本的な考えを述べてみた。しかし、佛教において、供養が如何なる位置を占めていたか、については、なお多くを語らねばならない。言うなれば、供養が佛教にとって宗教の目的であったか、或いは第一義的なもの、すなわち宗教の本質を形づくるものであるのか、それとも第二義的な意味しかもたないのか、という点などについて。この問題は、同時に佛教における宗教儀式、或いは生天思想とも関連するのであるが、それらの問題については稿を改めて述べてみたい。

註(1) 摩崖法勅十四章法勅の第一章。

- (2) DN. I. p. 55; cf. MN. I. p. 515.
- (3) DN. I. pp. 52-53.
- (4) MN. I. p. 403~
- (5) Rg. II. 12. 14. 辻直四郎博士『ヤキータとウヰンヤン』五一頁訳。
- (6) Rg. I. 24. 11. 辻 博士前掲書五五頁以下参照。
- (7) *Satapatha-Brahmana* II, 2, 2, 6. 前掲書六一頁参照。
- (8) *Gautama Ghyha Sutra* I, 1, 24; *Sata-Br.* XI, 5, 6, 1; *Manu* III, 83.  
cf. A. Hillebrandt: *Ritual-Literatur. Vedische Opfer und Zauber* SS. 105-166. bes. § 67; 76; 77.  
木村 高楠博士共著『印度哲学宗教史』四二二頁以下、特に四六六頁。
- (9) SN. I. p. 75. 大正一一・三三三八頁以下参照。
- (10) cf. Wilson: *On human Sacrifices in the ancient Religion of India.*
- (11) A. Hillebrandt: *Vedische Opfer* S. 153.
- (12) SN. I. p. 76; AN. II, p. 42; IV, p. 15; *Itivuttaka* p. 21; *Suttanipata* 303°.
- (13) *Suttanipata* 303°
- (14) SN. I. pp. 75~6; cf. AN. I. p. 43G.
- (15) SN. I. pp. 75~6.
- (16) AN. II, p. 42.
- (17) *Dhammapada* 106.
- (18) *ibid.* 107.
- (19) *ibid.* 108.
- (20) *Suttanipata* 428°.

- ⑫ DN. I, pp. 127~149. esp. p. 142~3.
- ⑬ SN. I, p. 169G.
- ⑭ SN. I, p. 19G.
- ⑮ AN. IV. pp. 39~67. esp. pp. 41~46.
- ⑯ *Jataka* No. 50. *Dummedha Jataka*
- ⑰ *Itivuttaka* pp. 21~22G; AN. IV, pp. 150~151G.
- ⑱ *Theragāthā* 648.
- ⑳ *Uttarajjhayana* XX, 13; cf. *Mahābhārata* III, 207. v. 94. 中村 元博士『慈悲』三二頁以下参照。
- ㉑ 中村博士前掲書三五頁以下。
- ㉒ DN. I, pp. 127~149.